

楊海英



静岡大人文社会科学部教授

発言

尖閣諸島をめぐる日中対立のさなか、中国共産党総書記に習近平氏が選出され、就任演説で「中華民族の復興」を唱えた。

尖閣を巡る中国の強硬姿勢の背景には、大國意識と中華民族ナショナリズムの高揚が指摘されている。長らく中国の少数民族を研究してきた視点から、問題の性質を考えてみたい。

日本で言及されることは少ないが「中華民族」という民族は

中華ナシヨナリズムの危うさ

存在しない。なるほど中国は漢族と55の少数民族からなる「中華民族」が古代からの分割不能な国民であるとの公式見解をとっている。しかしこれは、多民族国家のアメリカ国民を「アメリカ民族」と定義するようなもので、「中国に少数民族問題は存在しない」という立場からの虚構、幻想に過ぎない。

華は漢族を指す概念だ。昨年100周年を迎えた辛亥革命を主導した孫文も「駆除鞏虜、回復中華」を主張していた。満州

族の清朝を倒し、漢族が世界の中心の「中華」を立て直す漢族ナシヨナリズムだ。孫文の後継者、蒋介石の顧問を務めたアメリカ人中国学者、オーウェン・ラティモアも「中国は西欧列強の植民地だが、少数民族には植

民地政策を取っている。第二の帝国主義だ」と指摘していた。少数民族を植民地支配する体制は共産党に引き継がれた。満州族、ウイグル族、チベット族、そして私のようなモンゴル族は、90%を占める漢族への同化

を強制され、宗教や言葉など民族文化を守ろうとすると「分裂主義者」と弾圧される。ラサヤウルムチの暴動は、植民地支配に抵抗する悲痛な発信なのだ。それでも彼らは「中華民族」を自称し、「復興」を掲げる。

「経済的にも政治的にも世界一流の大國だった1840年のアヘン戦争以前の状態を取り戻せ」との主張である。しかし、愛國主義教育も加わり、論理的でない大國ナシヨナリズムが広く醸成されている。「中華」と

言いながらモンゴル帝国の版図も含め、冊封体制を根拠に「琉球回収」を主張し、軍部は「利益國境」の概念を打ち出している。「復興」には際限がない。9月の反日デモで掲げられた二つのプラカードが問題の本質を明らかにしている。

「モンゴルの草原を失っても釣魚島(尖閣諸島)を守ろう」「何千万人が死んでも釣魚島を死守せよ」。モンゴル族はこの表現に憤り、恐怖に震える。1950年代の大躍進政策で4000万人の餓死者が出て、文化大革命では、5万人のモンゴル族が虐殺された。デモはそれを

主導した毛沢東の肖像画と共行進された。「中華民族ナシヨナリズム」は、他民族を支配して主張される漢民族ナシヨナリズムである。だが、当人たちそのいびつさに気付いていない。少数民族は、その凶暴ながいつ自分たちに向けられるか、恐れている。

「中国異質論」は唱えない日本と同質の国でないことは明のことだからだ。今年の日国交正常化40周年の年である「日中友好」という標語に惑わされず、中国という国を冷静見つめ直す時期に来ているのではないだろうか。(寄稿)